

中国語母語話者のフィラー使用はどう変わっていくか

日本語会話における話し手の思考の言語化と聞き手への影響

石黒圭（国立国語研究所）

1. 研究の目的

初級・中級日本語学習者が日本語で話す場合、話している言葉は日本語なのに、間に入るフィラーが母語になることがある。日本語のなかに日本語でない音声が入ると、日本語学習者との接点がない日本語母語話者には、耳障りだと受け取られることも少なくない。そのため、そうした話し方の実態を知り、可能なかぎり、母語話者に違和感のない話し方に修正する指導法を考える必要がある。

一方、学習者のフィラーは、一般に母語のものから目標言語のものに変わっていく傾向があり、その実態を知ることは第二言語習得研究に必要であるだけでなく、発話のさいの学習者の脳内活動を可視化する手がかりとして有用だと考えられる。

そこで、本研究では、縦断学習者コーパスを用い、中国語を母語とする日本語学習者のフィラーの習得過程を明らかにすることを旨とする。

2. 研究の方法

本研究では、国立国語研究所、北京日本学研究中心、北京師範大学の三者が共同して構築した B-JAS と呼ばれる日本語学習者の縦断コーパスを用い、大学入学後に初めて日本語の習得を開始した学習者がどのように話し言葉を習得し、学習年数を経る過程でフィラーにどのような変容が見られるかを分析・考察する。B-JAS には 17 名の学習者のデータを含むが、本講演では、中国の同一の出身地の学習者 3 名を取りあげて、フィラーの習得過程を紹介する。

3. 研究の結果と提言

今回対象とした学習者のフィラーの習得を分析したところ、およそ次のような過程を取ることがわかった。

- ①日本語学習の初級段階では、中国語のフィラーが多い。また、何も話さない間がフィラーの代わりをし、フィラーは話しはじめの合図として使われる。
- ②日本語学習の中級段階に入ると、間が減少し、中国語のフィラーは依然多いものの、日本語のフィラーの使用が増加する。
- ③日本語学習も中級後半になると、中国語のフィラーが減少し、日本語のフィラーがそれにとって代わるようになる。
- ④日本留学を経験すると、中国語のフィラーはほぼ消失し、日本語のフィラーの使用も減少する一方、使用される日本語のフィラーの種類は増える。

指導上の注意点としては、フィラーの使用が多いこと自体は避けられないが、母語である中国語のフィラーにも日本語のフィラーに音が近いものと遠いものがあるため、使用する場合は前者を選択するように指導することで、違和感を下げることが可能になることを提案した。